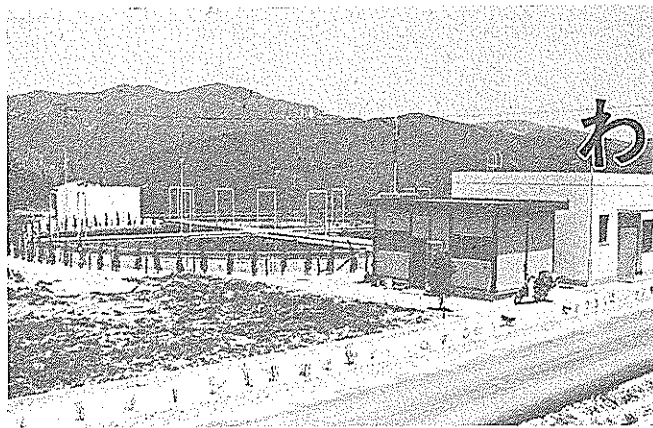
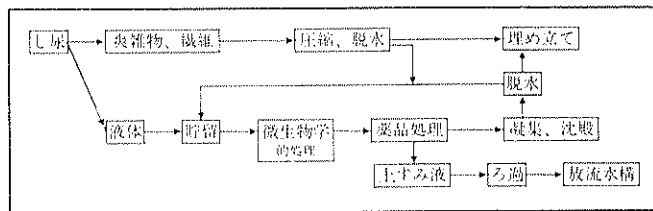




わたしたちの 1日あたり約



私たちの家庭や事業所から毎日収集されるし尿と浄化槽汚泥は約七十トン。
毎日奈路の中継槽を経由して市内最北端の黒滝し尿処理場までピストン輸送され、そこで全量処理されます。
この黒滝で処理が開始されたのは昭和四十七年から。もちろん好

し尿処理場が 抱える問題

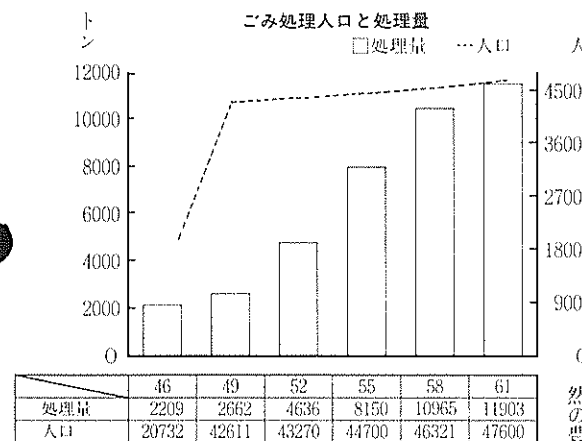
歴代の市の執行部と議会関係者の必死の努力にもかかわらず、結局施設立地場所が決まらず今日に至っているのが実態です。
さいわい地元の協力を得て、ここ当分の間、現処理場での処理には、まず問題が無い見込みですが日々の人間の生理に関係しているだけに、一日も早い恒久処理体制の確立が望まれています。
さて、その黒滝のし尿処理場。当初は処理量も少なかったということもあって、広大な市有林の一部に埋め立てをし、自然界の巨大な浄化力を利用する簡便な方法によつていましたが、昭和五十年代に入つて微生物処理を開始し、さらに昭和六十二年には大規模な改善工事を実施。処理水質も法規制に適合するまで能力向上を図つて

います。
ただ法規制上は問題ないものの計画した性能に一部不足があり、現在業者と協議していますが、運転には支障はなく、市の計画では五年間同施設を稼働させていく予定で
しかし、処理水は地下浸透とし、汚泥等については、脱水後地中へ埋め立てられているため、いつかは限界となることから、行政上の処理体制としては、やはり一部問題が残ります。また山間の長距離搬入路は、雨期のがけ崩れなども心配されます。
したがって市の計画は、現施設を稼働させながら、別に最新の一

五月十五日号から数回にわたつて紹介しております。昭和六十三〜六十五年度南国市実施計画は、紙面の都合により八月一日から再開いたします。

貴処理施設を適地に建設し、長期間安定処理体制へ切り替えていく予定です。
しかし、やはり問題は市民の根強いマイナスイメージ。そこで処理場の実態はどうなのかを次号で考えてみましょう。
※汚泥し尿を処理する過程で出てくる微生物及び、未分解の有機物。

廃棄物はどこへ 100 t を排出



現代社会では汚物と呼ばれ、やつかいものの代表格である人間の排泄物も、かつては家畜のふん尿などとともに大切に蓄えられ、農地に還元されてきました。台所から出る残渣も堆肥化され、果樹園や畑で利用されており、人間は自然の豊かなしくみのなかでその構成員の一員として存在していたのです。
ところが現在は、産業や経済の発展によつて自然のもたらす資源を利用して旺盛な生産活動を展開し、豊かな生活を維持するためにこれを消費しており、この過程から大量の廃棄物が生じます。これらの廃棄物は私たちの生活の場から速やかに除去し、処理しなければ快適な生活の妨げと

処理場は市の顔

もし、外観がいくら立派でもその家に便所がないとしたら、はたして快適な生活があり得るでしょうか。豪華な応接間があったとしても便所がいつぱいで汚れ放題ではいただけません。
それと同じように、いくら公共施設が充実している自治体であっても、廃棄物問題、なかでもし尿処理の問題があつては、生活程度

が低い文化的な自治体と言えるかどうか疑問です。
排泄とは、人間が生きているあかしのようなものであるとすれば結局私たちの日々のし尿は、一定の間隔でどこかで処理しなければならぬのは自明の理。
やつかいなものであるからこそ原点へ戻つて真剣に考えなければならぬ問題と言えそうです。

増える処理量

私たちの日常生活や生産活動によつて、南国市では一日当たり約百トンの不燃物やし尿などの廃棄物が生み出されています。しかしこれらを処理するための施設はいずれもしだいに耐用年数が迫つています。
しかし、廃棄物処理施設は、特に市民の理解と協力が無ければなかなか整備が進まないのが実態で、特にし尿処理施設はその代表格。
市民みんなが考えたいテーマです。

